

合成音声朗読オーディオブック

ハンケチ

手巾

(抄)

芥川龍之介

teabreak

定武禮久 編

手巾（抄）

芥川龍之介

先生は、本を置いて、今し方小間使が持って来た、小さな名刺を一瞥した。象牙紙に、細く西山篤子と書いてある。どうも、今までに逢った事のある人では、ないらしい。交際の広い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念の為に、一通り、頭の中の人名簿を繰って見た。が、やはり、それらしい顔も、記憶に浮んで来ない。そこで、栞代りに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、先生は、落着かない容子で、銘仙の単衣の前を直しながら、ちよいとまた、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやった。誰もそうであろうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、こういう場合は多く待遠しい。最も、日頃から謹厳な先生の事だから、これが、今日のような未知の女客に対してでなくとも、そうだと
いう事は、わざわざ断る必要もないであろう。

やがて、時刻をはかって、先生は、応接室の扉をあけた。中へはいって、おさへていたノツブを離すのと、椅子にかけていた四十かっこうの婦人の立上ったのが、殆、同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鉄御納戸の単衣を着て、それを黒の紹の羽織が、胸だけ細く刺した所に、帯止

めの翡翠を、涼しい菱の形にうき上らせている。髪が、丸髻に結ってある事は、こういう些事に無頓着な先生にも、すぐわかった。日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顔を、どこかで見た事があるように思った。

——私が長谷川です。

先生は、愛想よく、会釈した。こういえば、逢った事があるのなら、向うでいい出すだろうと思ったからである。

——私は、西山憲一郎の母でございます。

婦人は、はっきりした声で、こう名乗って、それから、丁寧に、会釈を返した。

西山憲一郎といえば、先生も覚えている。やはりイブセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、専門は確か独法だったかと思うが、大学へはいつてからも、よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹って、大学病院へ入院したので、先生も序ながら、二度見舞いに行つてやった事がある。この婦人の顔を、どこかで見た事があるように思ったのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元気のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容するように、驚く程、よく似ているのである。

——はあ、西山君の……そうですか。

先生は、独りで頷きながら、小さなテエブルの向うにある椅子を指した。

——どうか、あれへ。

婦人は、一応、突然の訪問を謝してから、また、丁寧に礼をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは手巾であろう。先生は、それを見ると、早速テエブルの上の朝鮮一団扇をすすめながら、その向う側の椅子に、座をしめた。

——結構なおすまひでございます。

婦人は、稍、わざとらしく、室の中を見回した。

——いや、広いばかりで、一向かまいません。

こういう挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持って来た冷茶を、客の前に直させながら、直に話頭を相手の方へ転換した。

——西山君いかがです。別段御容態に変わりはありませんか。

——はい。

婦人は、つましく両手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切って、それから、静にこういった。やはり、落着いた、滑な調子でいったのである。

——実は、今日も倅の事で上ったのでございますが、あれもとうとう、いけませんでございました。在生中は、いろいろ先生に御厄介になりました……

婦人が手にとらないのを遠慮だと解釈した先生は、この時ちょうど、紅茶茶碗を口へ持って行こうとしていた。なまじひに、くどく、すすめるよりは、自分で啜って見せる方がいいと思つたからである。所が、まだ茶碗が、柔な口髭にとどかない中に、婦人の語は、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだらうか、飲まないものだらうか。——こういう思案が、青年の死とは、全く独立して、一瞬の間、先生の心を煩わした。が、何時までも、持ち上げた茶碗を、片ずけずに置く訳には行かない。そこで先生は思切つて、がぶりと半碗の茶を飲むと、心もち眉をひそめながら、むせるような声で、「そりゃあ」といった。

——……病院にありました間も、よくあれがお噂など致したものでございますから、お忙しかろうとは存じましたが、お知らせかたがた、お礼を申し上げようと思ひまして……

——いや、どうしまして。

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた団扇をとりあげながら、儼然として、こういった。

——とうとう、いけませんでしたかなあ。ちょうど、これからという年だったのですが……私はまた、病院の方へも御無沙汰していたものですから、もう大抵、よくなられた事だとばかり、思っていました——すると、何時になりますかな、なくなられたのは。

——昨日が、ちょうど初七日でございます。

——やはり病院の方で……

——さようでございます。

——いや、実際、意外でした。

——何しろ、手のつくせるだけは、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんものでございます。

こんな対話を交換している間に、先生は、意外な事実に気がついた。それは、この婦人の態度なり、挙措なりが、少しも自分の息子の死を、語っているらしくないという事である。眼には、涙もたまっていない。声も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さえ浮んでいる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見ているとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語っているとしか、思わなかったのに相違ない。――

—先生には、これが不思議であった。

—昔、先生が、ベルリンに留学していた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに当る、ウイルヘルム第一世が、崩御された。先生は、この訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、元より一通りの感銘しこうけようはない。そこで、何時ものように、元気のいい顔をして、杖を脇にはさみながら、下宿へ帰って来ると、下宿の子供が二人、扉をあけるや否や、両方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色のジャケツトを着た、十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた、九つになる男の子である。子煩悩な先生は、訳がわからないので、二人の明い色をした髪の毛を撫でながら、しきりに「どうした。どうした。」と喋って慰めた。が、子供は中々泣きやまない。そうして、涙をすすり上げながら、こんな事をいう。

—おじいさまの陛下が、おなくなりなすったのですって。先生は、一国の元首の死が、子供にまで、これ程悲まれるのを、不思議に思った。独り皇室と人民との関係というような問題を、考えさせられたばかりではない。西洋へ来て以来、何度も先生の視聴を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のように、日本人たり、武士道の信者たる先生を、

驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたような心もちは、未に忘れようとしても、忘れる事ができない。

——先生は、今もちょうど、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを、不思議に思っているのである。

が、第一の発見の後には、間もなく、第二の発見が次いで起った。——

ちょうど、主客の話題が、なくなった青年の追懐から、その日常生活のデイトイルに及んで、更にまた、もとの追懐へ戻ろうとしていた時である。何かの拍子で、朝鮮団扇が、先生の手をすべって、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。会話は無論寸刻の断続を許さない程、切迫している訳ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。団扇は、小さなテエブルの下に——上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちている。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持った手が、のっている。もちろんこれだけでは、発見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるえているのに気がついた。ふるえながら、それが感情の激動を強いて抑えようとするせいか、膝の上の手巾を、両手で裂かないばかりに緊く、握っているのに気がつ

いた。そうして、最後に、皺くちやになった絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれているように、繡のある縁を動かしているのに気がついた。——婦人は、顔でこそ笑っていたが、実はさっきから、全身で泣いていたのである。

団扇を拾って、顔をあげた時に、先生の顔には、今までにない表情があった。見てはならないものを見たという敬虔な心もちと、そういう心もちの意識から来るある満足とが、多少の芝居気で、誇張されたような、甚、複雑な表情である。

——いや、御心痛は、私のような子供のない者にも、よくわかります。

先生は、眩しいものでも見るように、稍、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠った声でこういった。

——有難うございます。が、今更、何と申しましても、かえらない事でございますから……

婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顔には、依然として、ゆたかな微笑が、たたえている。——